

パニウム - ナンバー・シックス

ダニエル11章における預言的道標：ソ連の崩壊、日曜法、そして現代ローマの台頭

Jeff Pippenger

2025-03-09

1989年のソ連崩壊によって、ダニエル書11章40節が成就した。41節は16節と同様に、アメリカ合衆国における日曜法である。1989年からアメリカ合衆国における日曜法に至るまで、ダニエル書11章40節は空白である。1989年のソ連崩壊は、当初アンティオコス・マグヌスによって成就したダニエル書11章10節にも示されている。

セレウコス朝の「北の王」アンティオコス3世（大王）は、紀元前223年から187年まで統治し、第三次シリア戦争（紀元前246～241年）の後にプトレマイオス朝（「南の王」）に失った領土の回復を目指した。第四次シリア戦争（紀元前219～217年）での彼の遠征は、コイレ・シリア、フェニキア、パレスチナの奪還を目標としていた。紀元前219年、アンティオコスは南進し、ピエリアのセレウキア、テュロス、プトレマイス（アッコ）を攻略して、沿岸の要衝を取り戻した。紀元前218年にはさらに進軍してフィラデルフィア（アンマン）を占領し、ガザに至るまで失われたセレウコス領の回復を期してエジプトの国境へ迫った。アンティオコスは同218年に進軍をいったん停止して戦果を固め、決戦に向けた準備を進めた。プトレマイオス朝の王プトレマイオス4世フィロパトルは、エジプト兵を加えて軍勢を動員し、これに対抗した。ダニエル書11章10節はこのアンティオコスの動きを述べており、それによって1989年のソ連崩壊を予示し、11章40節を予表している。

しかし彼の子らは奮い立って大軍を集め、そのうちの一人が必ずや来て、押し流し、通り過ぎる。やがて彼は引き返し、彼の要塞に至るまで再び奮い立つ。ダニエル書 11:10.

四十節で北の王が「氾濫して通り過ぎる」とあるのは、十節の北の王が「氾濫して通り抜ける」とあるのと同じである。いずれの節でもまったく同じヘブライ語の語句が用いられており、訳し方が少し異なるだけである。これはイザヤ書8章8節に見られるのと同じ表現である。

彼はユダを通り抜け、氾濫して押し寄せ、越えていき、首にまで達する。伸ばしたその翼は、インマヌエルよ、あなたの地の広がりを満たす。イザヤ書 8:8

三つの節はいずれも、北の王に敗れる南の王を描いている。北の王アンティオコスが南の王プトレマイオスに勝利したのと同様に、センナケリブも南の王であるユダに勝利し、さらに、四十節の北の王は1989年にソ連を一掃した。これら三つの節とそれぞれの歴史的成就によって、1989年が「終わりの時」であることが特定される。したがって、十節は1989年を指し、十六節はアメリカ合衆国における日曜法を指しており、四十一節も同様である。

十一節から十五節は一連の聖句であり、四十節の隠された歴史の中にある特定の預言的な道標を明らかにする歴史的成就も伴っている。アメリカ合衆国における日曜法以前だが1989年以後に、ラフィアの戦いとその余波が十一節と十二節に、パニウムの戦いが十三節から十五節に記されている。

日曜法こそが定められた時である。というのも、そこで教皇権の致命的な傷が癒やされ、教皇が世界の王座に復帰するからである。その権威付与は、538年における教皇権の即位と、アクティウムの海戦における異教ローマの即位によって型どられていた。いったん預言的に王座に就けられると、異教ローマは360年間、絶対的に支配した。538年に教皇権が即位すると、千二百六十年間、絶対的に支配した。日曜法においてその致命的な傷が癒やされると、教皇権は象徴的な四十二か月のあいだ、絶対的に支配する。

また私は、その獣の頭の一つが死に至る傷を負ったかのように見た。しかし、その致命的な傷は癒え、全世界の人々は獣に驚嘆して従った。彼らは、獣に権威を与えた竜を拝み、また獣をも拝んで言った。「誰がこの獣に比べられよう。誰がこれと戦うことができようか。」また彼には、大言と冒瀆を語る口が与えられ、さらに四十二か月の間活動する権威が与えられた。黙示録 13:3-5

27節には「これらの王の両方」とある：

この二人の王の心は悪事を企てることに向かい、同じ食卓を囲んで偽りを語るが、うまくはいかない。終わりはなお、定められた時に至るからである。ダニエル書 11:27

二十七節の二人の王とは、前の二節に出てくる、その後アクティウムの海戦を戦った王たちのことである。

彼は大軍をもって、南の王に対してその力と勇気を奮い起こす。南の王もまた、きわめて大いなる強力な軍勢をもって戦いに奮い立つが、彼は立ちおおせない。彼に対して策略が巡らされるからである。まことに、彼の食卓の分け前を食べる者たちが彼を滅ぼし、彼の軍勢は押し流され、多くの者が討たれて倒れる。ダニエル書 11:25、26。

したがって、第27節は、先へ進む前に理解しておく必要のある不整合を生み出しています。第24節では、「時」はアクティウムの海戦に始まり、西暦330年の定められた時に終わる360年の期間を表しています。

この戦いにおける南の王は、マルク・アントニウスと同盟を結んでいたクレオパトラであった。オクタウィアヌスは、彼ら両者を打ち破るであろう北の王であった。定められた時（紀元前31年）に、かつて同じ食卓に着いて互いに偽りを語り合ったその二人の王は、アクティウムの戦いにおいて対峙することになる。

テーブルにつく二人の王は、パニウムの戦い（13節から15節）の歴史と一致しており、そこではアンティオコス・マグヌスとマケドニアのフィリップの同盟があった。この歴史的同盟は、キリストの時代のパニウムの名称（カイサリア・フィリピ）に象徴的に表された同盟とも対応している。またこの同盟は、レーガンと教皇ヨハネ・パウロ2世の同盟によって1989年にソ連が一掃される時、40節にも表されている。二人の王は紀元前31年以前に互いに嘘をつくが、これはアメリカ合衆国のサンデー法と一致する。ゆえに彼らの嘘は16節以前、すなわち13節から15節に表されている歴史の間に起こる。その歴史は、ラ

フィアの戦いの17年後のパニウムの戦いで成就し、さらに16節の成就としてポンペイウスがエルサレムを征服する137年前のことであった。

二十八節において、クレオパトラ（南の王）とマルクス・アントニウスの双方に対する勝利者であるオクタウィウスは、「大いなる富を携えて自国に帰り、その心は聖なる契約に敵対し、事を行ってのち、自国に帰る」と記されている。ウライア・スミスは、これら二つの勝利を、紀元前31年のアクティウムと、紀元70年のエルサレムの滅亡であると特定している。したがって二十八節は、三百六十年の始まりであるアクティウムの戦いと、紀元70年のエルサレムの滅亡に始まる歴史を示している。

そのとき、彼は多くの富を携えて自分の国に帰る。彼の心は聖なる契約に敵対し、彼は行動を起こし、自分の国に帰る。ダニエル書 11:28

二十四節の末句（しばらくの間）以降は、紀元前31年に始まり、三十一節の末句（荒廃をもたらす忌むべきものを据える）で終わる歴史的な一連の流れを示しており、それは538年に成就した。この流れはアクティウムの海戦から始まり、これは異教ローマが360年間にわたって絶対的に支配することの始まりを画した。この流れは538年に、教皇ローマが千二百六十年間にわたり絶対的に支配し始めることで終わる。これらの節とそれを成就した歴史において、330年の定めの時、聖書の預言における第四の王国としての異教ローマの歴史における分岐点を示している。最初の360年間の絶対的支配の期間の後には、538年、三十一節で述べられる教皇権の即位に先立つ帝国の崩壊の208年間が続く。これら八つの節の並びの中で、紀元前31年のアクティウムの海戦以前に起こった歴史的成就を示しているのは、二十七節だけである。

27節は「定められた時」に先立つ二人の王の会見を示し、29節は「定められた時」を示している。27節の「定められた時」は360年の期間の始まりであり、29節の「定められた時」はその360年の期間の終わりである。この始まりと終わりが「定められた時」を表している。

異教ローマの勢力拡大が始まったのは、ダニエル書8章9節で表されている第三の地理的障壁を征服したときである。

そのうちの一つから小さな角が現れ、南と東、そして美しい地に向かって、きわめて大きくなった。ダニエル書 8:9.

勢力拡大はアクティウムの海戦で始まり、続いて第八章九節における南の王（エジプト）の服属があった。

聖書の預言における第四の王国としての異教ローマの支配は、教皇ローマが第三の地理的障壁を克服した538年に終わった。アクティウムの海戦から538年までの全568年間は、異教ローマが第三の障壁を克服して聖書の預言における第四の王国となることで始まり、教皇ローマが第三の地理的障壁を克服することで終わる。

聖書の預言における第四の王国として描かれるその歴史は二つの時期を示している。第一はローマが自らを高める時期であり、その後ローマの没落が語られる時期が続く。最初の高揚の時期の始まりは、異教ローマが聖書の預言における第四の王国として支配した

全期間の始まりでもある。ローマの最初の高揚の時期は、定められた時に始まり、定められた時に終わる。またそれは北の王国と南の王国の結合から始まり、東の王国と西の王国への分裂をもって終わる。それは定められた時に始まり定められた時に終わるとともに、その始まりと終わりはアレクサンドロスの王国の四分割を表している。

27節と29節の二つの定めの時、ローマが至上の支配を行う期間を描写する、始まりと終わりの道しるべを表している。ダニエル11章41節と16節の成就として、アメリカ合衆国における日曜法の時に、現代のローマが象徴的な42か月のあいだ至上の支配を行う期間が始まる。27節の最初の定めの時、アメリカ合衆国における日曜法であり、二番目の定めの時、地上の最後の国がアメリカ合衆国の例に倣って最後の日曜法を施行する時を表し、そのことによって偶像の安息日の全世界的施行が確定することを示す。

その二つの預言的な道標とは、アメリカ合衆国における日曜令から世界的な日曜令の施行へと至ることであり、そしてその二つの日曜令は、二十七節と二十九節の二つの定められた時である。二十七節の最初の定められた時は、321年のコンスタンティヌスによる日曜令によっても予表されており、538年のオルレアン評議会における教皇の日曜令は、世界的な日曜令を表している。

十三節から十五節の文脈において、パニオンの戦いは十六節の日曜法に先立つ歴史である。その歴史の中で、互いに偽る二人の王の会見が成就する。十三節から十五節は、十節から十六節に示されている歴史の一部である。これらの節は、十節で第四次シリア戦争を、十一節でラフィアの戦いを、十二節でその戦いの余波を示している。十三節から十五節は、パニオンの戦いが起こり、またあなたの民を略奪する者として表された異教ローマが預言の叙述に登場する、紀元前200年の歴史を表している。

ダニエル書11章40節は1989年のソ連崩壊を指し示しており、16節はアメリカ合衆国における日曜法を指し示している。定めの時、先立って互いに偽りを語る二人の王の会合——すなわちアクティウムの海戦——は、1989年の終わりの時に続き、アメリカ合衆国の日曜法で結ばれる40節の歴史の枠内で起こる出来事である。27節は、1989年の後、しかし日曜法の前に起こる、40節の隠された歴史における一つの道標である。27節の「会合」は、日曜法でローマが力を得る前の道標である。538年に教皇権が力を得るに至るまでにはいくつかの道標があり、これらの道標もまた定めの際の前に起こる。それらの預言的な道標の一つが533年のユスティニアヌスの勅令であり、これは30節の「契約を捨てる者たちと通じる」という言及を成就した。

異教ローマの歴史において、定められた時へと導くほかの道標は次のとおりである。すなわち、330年には異教ローマが打ち倒され、同時にその「座」を教皇権に与えた。496年にはクロヴィスが自らの「権力」を教皇権に献じた。ダニエル書七章の成就として、異教ローマは教皇権のために「三本の角」を取り除き、その最後は538年にローマ市から東ゴート族を排除したことであった。508年には、異教が国の公認宗教の座を退き、カトリックに置き換えられた。538年は四十一節の日曜法を表し、496年は、クロヴィスと同様にレーガンが自らの権力をローマ教皇に献じた1989年を表している。330年は日曜法を指し示しており、そこで教皇権が権威の座に戻る。

これは、538年と330年の両方が「定めの時」を表しており、すなわち16節と41節であることを示している。496は、1989年にダニエル11章10節と40節、およびイザヤ8章8節が成就したことを表している。508は、王国の宗教がカトリックに置き換えられる時を指し示している。496年のクロヴィスに始まり508年に至るまで、王国の公認宗教の漸進的な撤廃と置換が示された。330年に始まる歴史では、西ローマの漸次的な衰退は最初の四つのラッパによって表されており、したがってアメリカ合衆国のサンデー法において始まる漸進的な破壊を示している。

西暦321年のコンスタンティヌスによる日曜法に続く異教ローマの漸進的な没落は、聖書の預言において第六の王国とされるアメリカ合衆国が日曜法に至る時にたどる没落を例証している。そして、ホワイト夫人が「国民的背教の後には国民的破滅が続く」と指摘しているとおり、四つのラッパの裁きがアメリカ合衆国に下される。さらに、エゼキエルも四重の懲罰について証している。

主の言葉が再びわたしに臨んで言った。「人の子よ、その地がわたしに背いて重い罪を犯すとき、わたしはその上に手を伸ばし、そのパンの杖を折り、飢饉をその上に送り、人と獣をその中から断ち滅ぼす。たといノア、ダニエル、ヨブ、この三人がその中にいても、彼らは自分の義によって自分のいのちだけを救い出すことができるにすぎない、と主なる神は言う。もしわたしが害獣をその地に行き巡らせ、それらがその地を荒らして荒廃させ、獣のために人が通ることもできなくなるなら、たといこの三人がその中にいても、わたしは生きている、と主なる神は言う。彼らは息子も娘も救い出すことはできない。彼ら自身だけが救われるが、地は荒れ果てる。あるいは、わたしがその地に剣を臨ませ、剣よ、この地を行き巡れ、と言って、人と獣をその中から断ち切るなら、たといこの三人がその中にいても、わたしは生きている、と主なる神は言う。彼らは息子も娘も救い出すことはできず、彼ら自身だけが救われる。あるいは、わたしがその地に疫病を送り、血をもってわたしの憤りをその上に注ぎ、人と獣をその中から断ち滅ぼすなら、たといノア、ダニエル、ヨブがその中にいても、わたしは生きている、と主なる神は言う。彼らは息子も娘も救い出すことはできない。彼らは自分の義によって自分のいのちだけを救い出すにすぎない。まことに、主なる神はこう言う。まして、わたしがエルサレムにわたしの重い四つの裁き、すなわち剣と飢饉と害獣と疫病を送り、その中から人と獣を断ち滅ぼすとき、なおさらではないか。しかし、見よ、その中には残りの者が残され、息子たちも娘たちも連れ出される。見よ、彼らはあなたがたのところに出て来る。あなたがたは彼らの道とその行いを見る。そして、わたしがエルサレムにもたらしたわざわい、すなわちわたしがその上にもたらしたすべてのことについて、あなたがたは慰められる。あなたがたが彼らの道と行いを見るとき、彼らはあなたがたを慰める。こうして、わたしがその中で行ったすべてのことを、理由もなく行ったのではないことをあなたがたは知る、と主なる神は言う。」 エゼキエル書 14:12-23

次回の記事でこれらの考察を続けます。